

5火～8金

伝道実践

近隣の町でのトラクト等の配布や訪問伝道、関係づくりなどを行います。その他、伝道ライブなども行います。



14木, 15金, 19水, 20木

聖書の人々 永井 学院長

聖書に登場する人物（預言者や士師、王など）それぞれの歩みや、神との関係などを考察し、信仰者としての在り方を学びます。



講義



拡大宣教学院 30周年記念聖会

2018年 4月17日(火) 14:00～/ 19:00～

4月18日(水) 10:00～

※4月17日(火) 11:00から
入学式、卒業式が行われます。

主講師：キム・ジョンイル師

韓国 スクール・オブ・オーガニック・プランターズ校長

Column 学院長のデスクから

主イエス・キリストのご降誕を心よりお祝い申し上げます。

この一年間（2017年）、皆さまのお祈りとご支援によって、私ども拡大宣教学院はその歩みを進めることができましたこと、心より感謝いたします。

来年（2018年）、学院は30周年を迎えます。4月には記念の時を計画しております。また、入学生の募集をしております。このためにも皆さまのご協力、ご加禱をよろしくお願いいたします。（詳細、願書などのお問い合わせは学院までお知らせください。）

新しい年が喜びと希望に満ちたものとなりますように！

学院長 永井信義



編集後記

ハレルヤ !! 今年も残りあとわずかです !! 発行が遅れることがありながらも、この一年間、マグニファイを発行し続けられたこと感謝します !!

さて、年越しを迎える前に、「キリスト教の三大祭り」と言われるうちの一つ、「クリスマス」があります。本誌の巻頭メッセージにも、このクリスマスについて書かれてありますし、皆さんも既にご存知の通り、「クリスマス」は、神様が私たちのために、「人」としてこの世に生まれた事、つまりは、イエス様の降誕をお祝いする日です。また、「感謝」する日です。

実は、この誕生を祝うだけではなく、「感謝」するというのは、イエス様に限らず、私たち人間に対しても出来るのではないかと思います。おそらく、世界中の多くの方が、自分の家族や友人、知人の誕生日には、「誕生日おめでとう!!」、「Happy Birthday!!」と、お祝いのメッセージを送ったり、実際にお祝いしたりすることでしょう。この時、同時に、その方々がこの世に生まれたことに「感謝」しても良いと思います。イヤ、もっと言うなら感謝する必要があると思います。それは誰であれ、その方々がこの世に生まれたから出会えたわけですし、多かれ少なかれ、そういった方々の影響であったり、その方々のおかげで今の自分があるからです。両親や祖父母（をはじめ、自分の先祖に当たる方々）に関しては、その方々がいなかったら、自分は生まれてきていないわけですから。

ですから私たちは、誰かの誕生日には、「おめでとう」と同時に是非「生まれ来てくれてありがとう !!」と感謝していきましょう。そして、その方々を造り、命をお与えになり、その方々と出会わせてくださった、主に感謝していきましょう。更には、誕生日だけではなく、普段からこれらの事に感謝出来るように、祈り求めてまいりましょう。

Editor's Note



Kakudai Mission Institute No.352

Magnify

拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ

ことばは人となって

イエス・キリスト福音の群
イエス・キリスト宮崎福音教会 日南チャペル 牧師

高森 恒喜 師



ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

（ヨハネの福音書 1章14節）

「ことば」が「人」となって私たちの間に住まわれた。「造り主なる神」が「肉体」をまとして地上に来てくださった事実。神学用語で「受肉（じゆにく）」と呼ばれる真理。そこに示される神の謙遜と慈愛。感動というよりも、衝撃すら覚える出来事です。天地万物の創造主が「朽ちゆく肉体」をまとしてくださった。永遠の神が、時間と空間に制約される「不自由な肉体」に自らを閉じ込めてくださった。全知全能の神が、人として「苦しみ」を味わい、また「死」を味わわれるために「肉体」を持たれた。すべて、無に等しい人間を救うために。

「天が地よりも高いように……わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」（イザヤ 55:9）とあるように、考えれば考えるほど「受肉」のみわざの偉大さは、永遠という時を費やしても到底計り知ることのできない真理であることを痛感させられます。そのことを踏まえたと、わずかではあるけれども「受肉」について聖書から学び、理解している事柄についてキリストの「神の小羊」「神の大祭司」「神の宮」という三つの側面から簡単にまとめてみます。

1. 神の小羊としての「受肉」の必要性

神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。（ローマ 8:3）

血を注ぎだすことがなければ、罪の赦しはない（ヘブル 9:22）わけですが、「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません」（ヘブル 10:4）。つまり、「動物」の犠牲では「人間」を完全に贖うことはできなかったのです。全人類を完全に贖うための犠牲のいけにえには「完全な人間（無罪）」であること、また「永遠性」を帯びていること、さらには「全世界に匹敵する価値」を持つことが要求されました。その要求を満たす方として、バプテスマのヨハネが「世の罪を取り除く神の小羊」として紹介した（ヨハネ 1:29）のがイエス様です。それは、神ご自身が「完全な犠牲のいけにえ」となるべく「肉体」をまとして地

上に来てくださった姿でした。その「肉体」をもって、イエス様は私たちの罪の罰を負い、赦しと聖別のための血を流し、神へのなだめの供え物として自らを捧げられたのです。

2. 神の大祭司としての「受肉」の必要性

神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。（ヘブル 2:17）

イエス様は「神の小羊」であるだけでなく、血を携えて聖所に入る「大祭司」としての役割も担ってられます。その大祭司となるために、イエス様は「肉体」を、すなわち「弱さ」をまとう必要があったと聖書は教えます。完全な「神」であり、完全な「人」である存在こそ、神と人との仲介者、真実の大祭司として必要とされる存在でした。その条件を満たすためにイエス様は私たちと同じ「弱さ（肉体）」をまとして、地上で三十年余の生涯を歩んでくださったのです。そして、天に挙げられた今もなお、「神」の心と「人」の心を完全に理解する「大祭司」として私たちのために執り成しの祈りを捧げておられるのです。

3. 神の宮としての「受肉」の必要性

「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう」……イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。（ヨハネ 2:19-21）

「キリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」（1コリント 15:20）。「初穂として」とは、「栄光のからだへ変えられる初めての存在として」という意味で捉えることができます。そのために、イエス様は「血肉のからだで時かれ、御霊に属するからだ（栄光のからだ）によみがえされる」（1コリント 15:44）という原則に自ら従われました。イエス様の地上での「肉体」が十字架で「滅ぼされる」ことは、三日目に新しい「栄光のからだ」へと復活し「初穂」となるために必要不可欠なことだったのです。今もって「栄光のからだ」に変えられているのはイエス様のみです。イエス様が「私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる」（ピリピ 3:21）のは再臨の時であると考えられます（1コリント 15:52）。私たちはその時を待望しています。なぜならその時にこそ、個人における「霊・魂・体」の救いが完成されるからです（ローマ 8:23）。

CONTENTS

巻頭メッセージ

ことばは人となって
高森 恒喜 師

イベントレポート

第16回
仙台ゴスペル・
フェスティバル

ザ・スポットライト

卒業まで残り一年
第25期生 佐藤 慎

BOOK あらかると

16th SENDAI GOSPEL FESTIVAL

第16回 仙台ゴスペル・フェスティバル



大衡ゴスペルクワイア

実行委員会の方々

レポート：第27期生 福森 雄一

11月4日、今回で16回目を迎える「仙台ゴスペル・フェスティバル」が開催されました。私は今年3月まで福岡で「New Wings」というゴスペルクワイアで活動しており、前回ゲストで出演したクワイアのメンバーから噂を聞いていたので、参加出来るのをとても楽しみにしていました。

実際に参加してみて一番驚いた事は、これほどの大規模なイベントを、ボランティアスタッフ中心で運営している事です。実行委員会には、立ち上げ当初から関わっている方が数名おられ、時間と労力を費やしてこのイベントの事前準備に携わっている事を知り、頭の下がる思いでした。また、実行委員には、実行委員長である永井学院長を始め、学院の先輩方や学生が携っており、その交わりの中で、一人の実行委員の男性が東北中央教会に導かれ、今年の10月22日に受洗するという嬉しい出来事もあり、この動きを通して確実に救いが起こっていることを体験させていただきました。

さて、私の実際の当日の動きは、まず朝8時に運営本部に音響機材を下ろし、その後、仙台駅前のステージのスタッフとして奉仕しました。途中、大衡ゴスペルクワイアとして出演する為、運営本部のある勾当台公園円形広場に行き、出演後、また駅前のステージに戻りました。そしてフィナーレステージでは、再度円形広場に戻り、運営本部のスタッフをさせていただきました。

駅前のステージは人通りが多く、天候は若干の小雨が降る時もありましたが、たくさんの方が足を止めて、楽しんでくださいました。それぞれに個性のある8組のクワイアがゴスペルを歌いましたが、なかでも、山形から参加したクワイアが印象的でした。20代から50代くらいまでの女性15名ほどのクワイアで、「教会で練習をしている」とMCの中で話していました。選曲も、「This little light of mine」といった、教会で古くから歌われているゴスペルや、「It's so easy」といった洋楽の曲なども交え、バランスの取れた選曲で、楽し

い雰囲気の中で歌っていました。その中に「天使にラブソングを」と有名な「JOYFUL JOYFUL」という曲があり、ラップの部分をオリジナルバージョンの英語でのラップではなく、「主の祈り」をそのままラップにしている、しかも50代くらいの女性の方が担当しており、その大胆さに軽い衝撃を受けました！「きっと皆さんクリスチャンなのだろうな」と思いつつ、ステージが終わって話しかけてみたところ、クリスチャンの方はそのラップをされた女性のみで、他の方はまだクリスチャンではないそうで、教会で練習しているのも、どうやら伝道の為のようでした。このような伝道の働きをされている方がいるということに励ましを受けました。そして、きっとこれから実を結んでいくのだらうと思いました。

他にも、色々な個性のあるクワイアがゴスペルをそれぞれの形で楽しみながら歌う姿を見て、「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ」という詩篇 150:6 の聖書箇所を思い起こさせられました。

仙台ゴスペルフェスティバルについては、テレビや新聞などのメディアでも取り扱われていて、実行委員の方々の地道な働きが継続される中で、地域の方の信頼を得るほどに浸透していることを肌で感じる事が出来ました。

私自身、ゴスペルを歌うことを通じて救われた者の1人として、今後もこの働きが益々祝福され、1人でも多くの方が本当のゴスペル、福音を聞き、救い主イエス・キリストと出会うことができるように、働かせていただきたいと決意を新たに1日でした。



卒業まで残り一年

第25期生 佐藤 暲

2015
クリスマス
LIVE

2016
リファイン
聖会

仙台
ゴスフェス
(2016)

2015年
入学式

タケノコ
堀い

2017
リファイン
聖会

第24期生
卒業式

ゴスペル
タウン祭り
2017



私は2015年度後期に入学したので、10月で3年生になりました。この2年間を振り返ると、長かったような気もしますし、あっという間だったような気もします。

入学当初は、学院内での生活ルールや、奉仕で使う用具、食器、薪、ゴミ、などなど、どこに何があり、どの様に片づけるのか、また、どういったスタイルで、どんな決まり事があるのか等、覚える事が山ほどありました。また、学院に入学する前は一人暮らしだったので、学院での生活は、こんなにも自由が無いのか！と、当時はとても窮屈に感じていました。しかし2年経って振り返ってみると、学院でのルールは自分を窮屈にさせるためのものではなく、キリスト者、献身者としての歩みを守るために必要なルールなのだ、改めて気付かされます。このキリスト者としてのルールを守るということは、一般的な価値観と対立することも少なからずあります。

一人では出来なかった事が、同じ価値観、同じ信仰の仲間がいると出来たりします。これからも仲間を大事にしていきたいと思います。

そして私には学生としての期間が残り1年しかありません。このラスト1年、気合を入れなおします。たくさん吸収し、もっと砕かれて、内面的な部分でも、スキル面でもさらに向上していこうと思います。これからの残り1年間、どうぞよろしくお願い致します。

BOOK あらがる

永井信義

この秋に宣教に関する二つの国際会議に参加し、その中で日本、そして、日本の教会に対する期待を何度か耳にすることができました。今回紹介するジェームス・フーストン著『キリストのうちにある生活』(いのちのことば社)でも、著者は日本を「世界の中で希有で恵まれた国」と評しています。

本書はこの国の「キリスト教がさらに信頼されるものになっていくこと」を願って書かれています。1922年生まれの子が記した、一読の価値のある一冊です。